

【研究ノート】

伝統社会の変化と生存

—ビシュヌプル市の鉄鍛冶の経済的・社会的構造について—

齋藤 貴之

I. はじめに

本稿は、インド東部西ベンガル州、バンクラ県(Bankura District)、ヴィシュヌプル・ブロック(C. D. Block Vishnupur)のビシュヌプル(Bishnupur)市において、カマー(Kamar、あるいはカルマカル、コルマカル、Karmakar)と呼ばれ、「伝統的」に鉄鍛冶を営むジャーティの変化と生存に着目し、社会変動のなかで生じた経済的・社会的構造を検討することで、中間ジャーティ集団研究の一端を担おうとする試みであり、また、本研究を通して、今後のインド社会の変化について考察するきっかけをつかむことを当面の目的としている。

インド社会に関する研究は、1950年代以降、現地調査に基づく村落研究を通して数多くなされるようになり、そこでの中心的な課題は、有力な農業ジャーティとそれ以外のジャーティとの関係を体系的に理解することであった。特に、ワイザー(W. H. Wiser)が提出したジャジマニ・システムの概念は、さまざまな批判を受け、多くの問題点が指摘されつつも、研究の中核を担ってきたように思う。このため、多くの研究における実際の焦点は、農業ジャーティであり、その以外のジャーティは副次的な対象に過ぎなかったために、職人・サービスジャーティに重点をおいた研究は概して乏しく、1980年代以前の研究としては、鹿野(1987)の「管見の限りでは、Behura、Mukherjee、Seddonらのそれを除けば、村落研究の一環として、特定の村落に住む農村カーストとの関係に限定してふれられるに過ぎない、といった傾向が強かった」(鹿野 1987:4)という。また、篠田は、その「史料制約と問題関心の低さから、近年長足の進歩をみせているインド近世社会経済史研究のなかで、職人・サービスカーストの研究は、とり残された分野になっている」(篠田 1989:180)と述べており、それらのジャーティに関する研究の遅れは、人類学に限った問題ではないと言える。しかし、鹿野が指摘するように、職人・サービスジャーティは、農業ジャーティに比べて、「もともとより広い地域的な広がりの中で異カースト間関係のネットワークを保持する傾向が強く、かつ、特に近代以降、外部からの商品流入に対して、しばしばもっとも直接的な影響をこうむりがちであった」(鹿野 1987:4-5)ことから、個々の地域で具体的な資料を積みあげていくことは、インド社会の性格をあきらかにしていく上で欠かせない作業であると言えよう。

そうした中で、1980年代ごろから、いくつかの新しい研究傾向が現れ、徐々にではあるが、職人・サービスジャーティに注目した研究がなされてきている。その1つが、中間ジャーティ集団(intermediate jatis)研究³であり、それは「インド社会において中位層に位置すると考えられる諸ジャーティ集団の動向を中心に分析を進める研究である」(福永 1989:87)。この研究は、「上下両極のジャーティ集団に重点を置いて社会構造を解明しようとしたことに対する反省から生まれたといえるだろう」(福永 1989:87)が、単なるインド社会の現状分析に終始するものではなく、「社会変動の可能性が最も高いと考えられる集団として、インド社会の最大人口層である中間ジャーティ集団に注目し、それらの動向を分析することから、今後のインド社会はどのように変化するのかという問題について、解答の導きだしを試みる」(福永 1989:87)ものでも

ある。

社会変動の可能性が最も高い中間ジャーティ集団の中でも、特にその可能性が高いのが職人・サービスジャーティ(指定カースト・指定トライブに属するものは除く)であらう。中山(1989)は、インド村落における職人のサービス圏について、「インド村落における職人は、基本的にその個人が有する専門技能を評価されて労働価値の対象となっている。したがって、個々の職人のもつ技術水準は、レベルの差があるのは当然であり、従前より職人が自身の技術を受け入れてくれる村落に移動したり、村人がより信頼できる技術を求めて他の村落の職人のサービスを買いに出掛けたりといった現象は古い時代より頻繁に行なわれていたと考えられる」(中山 1989:89)とし、カルナータカ(Karnataka)州のパンダワプラ(Pandawapura)町の鍛冶を対象とした検証によって、鍛冶が村落職人層の自村域を越えたサービス圏を持つことを示している。そして、篠田(1989)は、「道路の整備と定期バス網の確立は、村民の日常的な行動半径を拡大し、村外の市場への接近を容易にしている。これは、生産構造のみならず、消費構造をも大きく変えている。さらに、この間の技術変化、とりわけ農業生産手段と消費財の変化は、鍛冶工、織工などの伝統的職業を消滅させるほどのインパクトを与えている。また、流通、生産構造の再編のなかで、存続する伝統的職業は一定の適応を迫られている。製造から修理への仕事内容の移行(大工職)や人口規模の大きい町村への移住、また兼業化の進展は、適応の諸形態とみることができよう」(篠田 1989:204)と述べている。これらのことから、19世紀後半以降の鉄道網、道路網の展開・整備、農村部への定期バス網の確立などにより、従来の村落住民や職人の移動が活性化し、村落住民は、高い技術水準や安価な製品、新たな製品を求めてより頻繁に市場町などの大規模町村へ出掛け、職人は、事業の拡大やより大きな需要を求めて、より大きな市場を期待できる都市部への進出を試みるようになったことが考えられる。これにより、職人・サービスジャーティが提供する生産物やサービスの需要は、大規模町村や都市部に集中し、村落では、職人・サービスジャーティの「伝統的」職業の衰退や消滅が進み、他方、人口規模が比較的大きく、交通網が発達した町村や都市部では、それらの「伝統的」職業が発展するという二極化が生じることが予想される。しかし、中山(1989)が述べるように、1960年代後半から、緑の革命の進展の過程で、農業経営が集約化されたことにとともに、鋤や鎌を使用する農作業はそれ以前よりもむしろ増加したと言われており、しかも、それは農業労働者の手仕事を増加させることにもなった。このため、農業労働者の「鎌・鋤の使用頻度が上がり、それらの修理・整形に対する需要が高まり」(中山 1989:84)り、また、それは、「農民からの需要発生の緊急性のため、身近かな村落レベルで必要とされる」(中山 1989:77)。こうしたことから、職人・サービスジャーティの「伝統的」職業、特に農業用具などを製作する鍛冶や大工が村落レベルで減少し、人口規模の大きい町村や都市部のみに集中するという事は考えられにくい。したがって、現在にあっても、村落レベルでの「伝統的」職業の生存を可能にする経済的・社会的構造が生じていることが予想される。そこで、本稿は、ビシュヌプル市の鉄鍛冶の事例をもとに、都市部における職人・サービスジャーティの変化と生存に着目しながら、社会変動の結果生じた新たな経済的・社会的構造について検討する。

本稿が鉄鍛冶を「伝統的」職業とするカマーをとりあげるのは、鍛冶がインド社会において他のいくつかの職業(例えば、土器製作、木工、床屋、革細工など)とならんで、現在でも比較的強固にジャーティと結びついているとされる職業の1つであり、かつ、地域によってその名称や地位、内容に相違があるものの、インド各地にかなり普遍的に存在するものと考えられるからである。対象地域としてのビシュヌプル市は、バンクラ県第2位の都市であり、村落に比べ

ば、変化は大きく、ジャーティ間関係を扱う上では必ずしも理想的な対象地ではない。しかし、後述するように、ある程度まとまった鉄鍛冶を営むカマーが存在することから、同一環境における比較・分析が可能であり、また、農耕地に囲まれ、交通の便も比較的良く、ある程度規模の大きい商店街や市場が存在するため、農業用具などの購入を目的に周辺の村落住民の多くが集中する地であることから、本稿の対象地域として適していると考えられる。

以下では、本稿の記述の対象となる地域の概要を略述した後、その地域で実際に鉄鍛冶に従事しているカマーの現状とその経済的活動について具体的に述べる。ついで、村落の鉄鍛冶の存在を可能にさせている経済的・社会的構造を、主にその営業に着目しながら検討する。



図1 ビシュヌプル市の位置⁵ (参考ホームページをもとに作成)

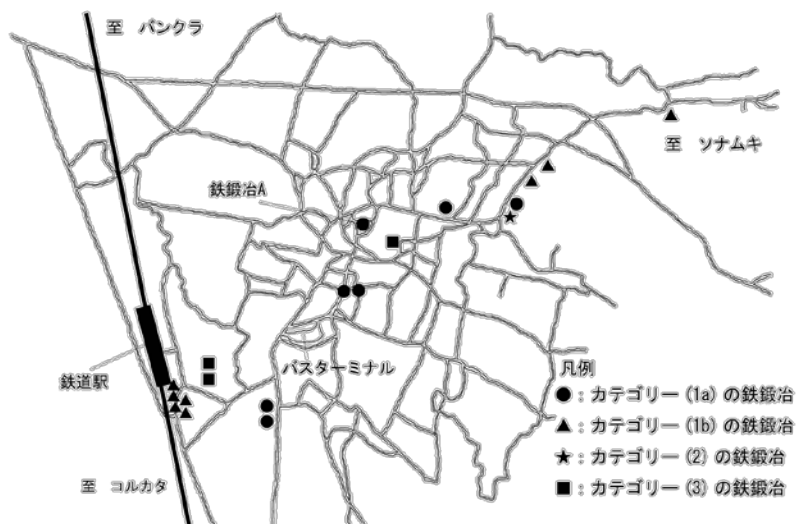


図2 ビシュヌプル市の鉄鍛冶の分布

II. ビシュヌプル市の概要

ビシュヌプル市は、インド東部、西ベンガル州の北西部に位置するバンクラ県中南部にあるヴィシュヌプル・ブロック唯一の都市である。県都バンクラに次ぐ県第2の都市であり、面積 22.01 km²、人口は 2001 年の統計によれば約 62,000 人で、総世帯数は約 12,600 軒である。バンクラ県を代表する穀倉地に囲まれ、周辺一帯には、農耕地が広がっている。

ビシュヌプル市全体としては、平原地帯に属し、おおむね平坦であるが、城跡周辺はやや丘陵になっており、また、市内には、主だった河川はないが、至る所に貯水池が見られる。ビシュヌプル市は、ヴィシュヌプル・ブロックの政治・経済の中心であるとともに、西部には鉄道駅があり、また中央部には州都コルカタ(Kolkata)と県都バンクラを結ぶ幹線バスの経路地があり、交通の要所ともなっている。州都コルカタまでは約 200km で、定期バスは 1 日 5 往復あり、また、鉄道も急行を利用することができ、交通・輸送条件には、比較的恵まれていると言える。しかし、市内の道幅は非常に狭く、西部から東部に抜ける幹線でさえバス 1 台がようやく通れるほどであり、一般自動車の通行可能な道路は限られている。市内の主要な交通・輸送手段は、リキシャー(人力車)、自転車、牛車、などである。

ビシュヌプル市は、都市的性格を持つため、統計上「その他」として一括される職業に従事する人口が最も多く、就業人口中に占める従業者の比率は80.9%に達する。このカテゴリーには、商業、公務員、教員、宗教・儀礼サービス従事者、運送業従事者、床屋、洗濯屋、その他のサービス従事者など、かなり雑多な職種が含まれており、市内中心部には、商店が連なり、毎日市が開かれている。ついで多くの就業者がいるのは、家内工業従事者であり、全就業者の 15.4%を占める。土製品、綿織物、真鍮製品が主要な製品であり、土製品はテラコッタ手工芸品として知られており、テラコッタ寺院と呼ばれる土製の装飾壁の寺院は、観光名所にもなっている。また、綿織物もバリチュリ・サリー(Barituri Sari)と呼ばれ、州都コルカタなどでもその名がよく知られている。こうした家内工業は、市内中心部の商店街や市場を囲むように分布している。本稿の対象である鉄鍛冶も、統計上は、家内工業従事者の中に含まれているが、詳細な数は明確にはされていない。一方、農業従事者は、自作農と小作農を合わせても、全就業者の3.7%を占めるに過ぎないが、バンクラ県自体は州第4位の穀物生産量を誇り、ヴィシュヌ

表1 ビシュヌプル市の概況

面積 (km ²)	22.01	人口密度(人/km ²)
世帯数 (軒)	12598	
人口 (人)	61927	2813.6
就業人口(人)	21428	就業人口比 (%)
農業 (人)	749	3.5
家内工業(人)	3293	15.4
その他 (人)	17332	80.9

(Census of India 2001 より作成)

プル・ブロックでも農業従事者数は、全就業者の 63.8%を占めることから、ビシュヌプル市を含むこの地域における主要な産業は、農業であると言える。また、ビシュヌプル市内およびその周辺には、多くの池や川が存在し、そこでの漁は古くから盛んであり、また、市場でもたくさんの魚売りが見られることから、漁業も主要な産業の1つであると言える。

III. ビシュヌプル市のカマー

1. 概況

この市およびこの地域で鉄鍛冶を「伝統的」職業とするのは、カマーという名称のジャーティ集団である。鉄鍛冶を主生業とする者は、(1)「伝統的」に鉄鍛冶に従事するカマー・ジャーティ、(2)(1)以外のカマー・ジャーティ、(3)その他のジャーティ、などに分類される。また、カマー・ジャーティにおいても「伝統的」職業と実際の職業との乖離が見られ、その成員はその

主生業から、(1)鉄鍛冶、(2)真鍮鍛冶、(3)他の職人・サービスジャーティの「伝統的」職業、(4)農業、(4)その他の職業、などに分類される。しかし、調査の不十分さや筆者の能力の限界などから、鉄鍛冶を主生業とする者以外のカマー・ジャーティに関する言及、および異なる製品を扱うカマー・ジャーティ集団間の婚姻関係や社会的関係について扱う用意がない。したがって、本稿の記述の対象は、主として、前者の(1)~(3)および、後者の(1)に属する鉄鍛冶のみである。

筆者の調査によれば⁶、ビシュヌプル市には、鉄鍛冶が19軒存在し、その製作する製品によって、大別して、(1)鉄製品全般、(2)釣り針、(3)ドア部品や建築用材、という3つのカテゴリに大別される。このうち、最も軒数が多いのは、鉄製品全般を製作する鉄鍛冶であり、約80%を占める。鉄製品全般を製作する鉄鍛冶はさらに、蹄鉄および車を製作しない者(1a)とする者(1b)という2つのカテゴリに大別される。カテゴリ(1a)に属す鉄鍛冶は、8軒で、主として、商業者や製造業者向けの鉄製品を製作し、商店街や市場がある市内中心部に分布しており、一方、カテゴリ(1b)に属す鉄鍛冶は、7軒で、農業に用いられる道具の製作および修理が主であり、農地に近い市周縁部に分布している。また、カテゴリ(2)に属す鉄鍛冶は、1軒で、主に川や池などで行われる家庭用消費向けの漁に用いられる釣り針を専門に製作している。そして、カテゴリ(3)に属す鉄鍛冶は、3軒で、それらを扱う業者や商店に卸すための製品を製作しており、主要な道路には面さず、奥まった場所で営業している。カテゴリ(2)および(3)に属す鉄鍛冶については、特定の製品を専門的に製作しており、他の製品は製作していない。

すでに述べたように、本稿の記述の対象は鉄鍛冶を主生業とする世帯であることから、以下では、鉄鍛冶の鍛冶製品の販売や修理・研ぎの請負といった営業に焦点を絞り記述を進めてゆく。

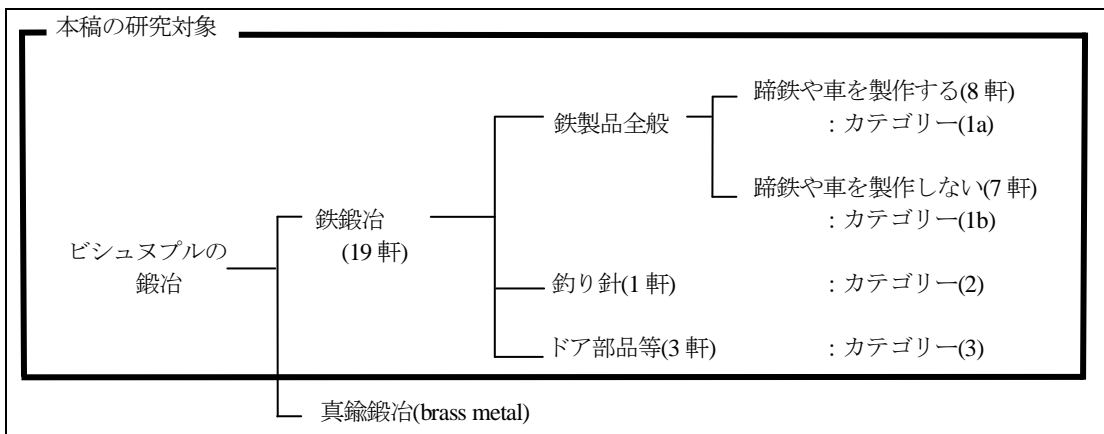


図3 ビシュヌプル市の鉄鍛冶の分類

2. 鉄鍛冶の営業

ビシュヌプル市の鉄鍛冶は、鉄製品の製作と同様、基本的には、営業も個々の世帯単位で行う。鉄鍛冶の営業には、大別して、各世帯が製作した鉄製品の販売と、依頼された製品の修理および研ぎの2つの分野がある。

販売方法としては、①訪ねてきた利用者に販売する、②訪ねてきた業者に販売する、③鉄

製品を扱う商店を回って販売する、④近隣の各戸を個別に訪問し販売する、⑤農家などと年間契約を結んで販売する、⑥近隣の定期市などへ製品を運び販売する、⑦遠隔地に製品を運び販売する、などが考えられる。また、修理および研ぎの請負方法については、①訪ねてきた利用者に依頼された製品の修理および研ぎを行う、②近隣の各戸を戸別に回って依頼された製品の修理および研ぎを行う、③農家などと年間契約を結んで、依頼された製品の修理および研ぎを行う、④近隣の定期市などで依頼された製品の修理および研ぎを行う、⑤遠隔地で依頼された製品を収集し、持ち帰り、それらの修理および研ぎを行う、などが考えられる。

しかし、ビシュヌプル市の鉄鍛冶において実際に観察されたのは、製品の販売法については、方法①~③であり、修理および研ぎの請負方法については、方法①のみであり、中には、修理や研ぎを一切請け負っていない者もいた。そして、ほとんどすべての場合において、それは仕事払いであり、年間契約払いや掛け売り、あるいは農産物やサービスとの交換などを通じた利用者との関係は見られなかった。また、溝口(1991)は、「南アジアのカースト社会全域でほぼ共通して認められる点は、職業カーストの多くが定期市を重要な仕事の場としていることである。ジャジマニ制が解体しつつある今日、彼ら職業カーストの生き残りの場として定期市の意義がますます高まってきているように思える」(溝口 1991:47)としているが、ビシュヌプル市の鉄鍛冶に関してはそうした定期市やその他の市に対する営業的依存は見られなかった。以下では、観察された製品の販売方法、および修理・研ぎの請負方法について記述する。

販売方法①は、カテゴリー(3)に所属する以外のすべての鉄鍛冶が取り入れている。しかし、近年、コルカタなどから流入する安価な鉄鍛冶製品や工場製品を商店や市場から購入することが一般的になっており、鉄鍛冶の仕事内容も製作から修理へと重点が移動しつつある。特に、カテゴリー(1a)に属す鉄鍛冶にその傾向が強く現れており、8軒の内の3軒は、自ら原材料を購入することはなく、利用者の持ち込みに依存しており、残りの5軒の内の3軒は90%以上を修理や研ぎに依存している。工場製品の普及を反映して、鉄鍛冶の製品ばかりでなく、工場製品の修理や研ぎを請け負う者も多くなってきており、工場製品を請け負わないのは3軒に過ぎない。

修理や研ぎに重点をおく鉄鍛冶 A は、実際に、修理や研ぎを目的として訪れる利用者が、全体の90%以上を占めている。そして、この鉄鍛冶は、ビシュヌプル市内で回転式の研磨機を備えた唯一の鉄鍛冶であるため、比較的用户者が集中しており、また、ビシュヌプル市以外から訪れる利用者も多く見られ、全体の40%近くを占める。利用者としては、ハサミを用いる職業に従事する者が多く、全体の約46%を占める。床屋⁷は、交通の便が良く、その地域の中心を担っているビシュヌプル市のような場所に集中する傾向が高く、多くの床屋が、鍛冶製品か、工場製品かの如何にかかわらず、ハサミやひげ剃りの研ぎを依頼しにやってくる。また、織物業はビシュヌプル市の主たる産業の1つであり、それに従事する者の数も多く、また彼らにとってハサミは不可欠な道具であり、定期的な研ぎを施すことが必要であることから、鉄鍛冶を訪れる者が多い。

表2 工業製品の修理・研ぎ

	実数(軒)	割合(%)
鍛冶屋の製品のみ	3	15.8
工業製品も取り扱う	12	63.2
修理・研ぎを行わない	4	21.0
計	19	100.0

表3 鉄鍛冶 A 利用者の居住地

	実数(軒)	割合(%)
ビシュヌプル市	62	60.8
周辺地域	39	38.2
その他	1	1.0
計	102	100.0

次に、販売方法②については、カテゴリー(1b)に属す鉄鍛冶に多く見られる。業者が定期的に蹄鉄を仕入れに各鉄鍛冶を訪れ、蹄鉄の製作を行う7軒の内の4軒が、2~7の業者と取引を行っており、それらの業者は西ベンガル州一帯で販売を行っている。製作量の多さから、コルカタから直接原材料を仕入れているところもある。

40年ほど前に1軒が業者への蹄鉄の販売を始め、その後、25年ほど前、20年ほど前、10年ほど前、というように次々に業者への販売を開始した。西ベンガル州の多くの村落にとって農業は主たる産業であり、現在でも牛や水牛は農業に欠くことのできない存在である。しかし、「近年、市場町での農具の購入が一般化しており」(篠田 1989:199)、また、「農業生産手段と消費財の変化は、鍛冶工、織工などの伝統的職業を消滅させるほどのインパクトを与え」(篠田 1989:204)ることや、人口規模の大きな町への鉄鍛冶の集中などが生じている。これにより、各村落への鉄鍛冶の分布率が低下し、15~20日に1度の蹄鉄交換が必要であるにもかかわらず、鉄鍛冶からのサービスを受けることができないという状況が生まれたことが、こうした蹄鉄業者を誕生させる地盤を生じさせたのであろう。ビシュヌプル市内でも鉄鍛冶による蹄鉄の付け替え作業が頻繁に見られ、使用済みの蹄鉄は古鉄業者に買い取られる。2月から7月が蹄鉄製作の季節であり、1ヶ月に約2500個の蹄鉄製作することもある。中には、1年中蹄鉄を製作し、営業のほぼすべてを蹄鉄製作に依存しているところもある。

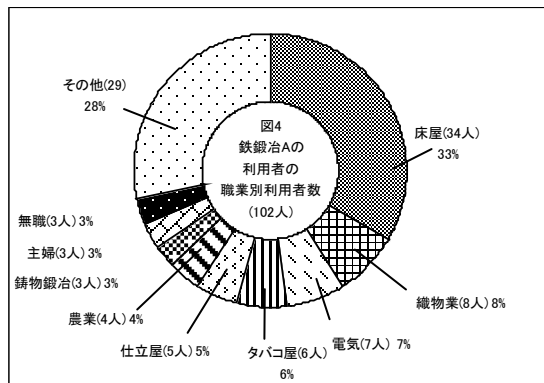
販売方法の③については、特に、カテゴリー(3)に多く見られる。数カ所に多くの量を卸す場合が一般的ではあるが、少量ずつ多くの商店に卸す事例も見られる。ビシュヌプル市内の商店ばかりではなく、近隣の町の商店に卸すこともあり、中にはビシュヌプル市内の商店には卸していないところもある。また、カテゴリー(3)に属する鉄鍛冶は、修理や研ぎを請け負うことはほとんどない。

その内の1軒は、現業主自らが開業し、息子と従業員2人の4人で製作を行っている。原材料をコルカタから仕入れ、1週間に約300kgのドア部品を製作し、西ベンガル州東南端のコトゥルプル・ブロック(C. D. Block Kotulpur)のコトゥルプル(Kotulpur)町にある8軒の商店に販売している。順調に営業をしてきたが、2004年に入り、材料である鉄の値上がりや販売価格の値下がり、税金の値上がりによって収入が落ち込んできている。60年ほど前からこれらの製作に携わっている鉄鍛冶が、「たくさんの人がこの種のものを作ようになったから、続けていくのは難しい」と語るように、近年、ビシュヌプル市内でも、ドア部品や建築用具の製造に移行する鉄鍛冶が増加傾向にあり、厳しい競争原理の中に置かれつつあることも影響しているであろう。

カテゴリー(1a)に属す1軒と、カテゴリー(2)に属す鉄鍛冶も販売方法の③を取り入れている。前者は、主として、調理用具を製作しており、製作品目は100種類を越える。販売先はビシュヌプル市内に限られ、以前は、利用者への販売と商店への販売が半々であったが、近年、商店

表4 鉄鍛冶A利用者の利用目的

	人数(人)	割合(%)
修理・研ぎ依頼	93	91.2
製作依頼	9	8.8
計	102	100.0



への販売が占める割合が増加する傾向にあり、販売先も 7 軒から 15 軒に増加している。これも、商店や市場で鉄鍛冶製品などを購入することが一般的になってきたことによる影響であろう。また、後者は、主として釣り針を製作しており、近隣地域の商店に販売している。ビシュヌプル市内および周辺には多くの池があり、昔から漁業も盛んであるが、漁業に主生業と従事する人びとは主として漁網を用いるため、鉄鍛冶の製作した釣り針の利用は、自家消費のための漁に限られる。6 月から 10 月が釣り針製作の季節であり、1 日に 30 人ほどの利用者が訪れる。工場製の釣り針も出回りつつあり、売り上げは落ちてはいるものの、釣り糸の取り付けまでを行い、針の数や針の大きさについての要望にも応じるため、その需要は衰えておらず、釣り針を製作する鉄鍛冶が希少なこともあって、釣り針の製作のみで営業が成り立っている。このことは、16 年前から、カテゴリー(1)に属する鉄鍛冶の 1 軒が、釣り針の製作を取り入れたことから見て取れる。

以上を要約すれば、ビシュヌプル市内の鉄鍛冶は、基本的に、鉄製品全般を製作しているが、その中には農業従事者を主たる対象とするところと、職人やサービス従事者および商業従事者に重点をおくところがある。また、それとは別に、鉄製品全般は扱わず、釣り針やドア部品などの製作に特化するところもある。そして、それらの製品は、年間契約や戸別訪問などの利用者との安定的な関係を通して販売されるのではなく、工場製品や商店、あるいは他の鉄鍛冶との厳しい競争原理の下で販売がなされる。そうした中で、自らの存続のための適応を迫られた結果、土器製作⁸に見られるような、定期市や遠隔地に需要を求めるといったことは見られなかったが、代わりに、仕事内容を製作から修理に重点を移動させる、あるいは、営業内容を周辺住民から業者や商店に重点を移動させるという動向が見られた。前者は、自らの技術水準を上げることで、市内はもちろん周辺地域からの利用者も集中させ、営業の拡大と安定化を試みている。一方、後者は、新たな需要に応じ、利用者との関係に代わる業者や商店との新たな関係を築くことで、営業の安定化を図っている。

以下では、村落の鉄鍛冶の存在を可能にさせている経済的・社会的構造を、主に利用者との関係に注目しながら多角的に検討する。

IV. ビシュヌプル市の鉄鍛冶の経済的・社会的構造

製作製品別に大別した 3 つのカテゴリーについて、その性格から再度検討を加えると、カテゴリー(1b)に属す鉄鍛冶は、主として農業用具を製作することから、利用者は農業従事者が主体であり、一般的な村落的性格を持つ。また、カテゴリー(1a)に属す鉄鍛冶とカテゴリー(3)に属す鉄鍛冶は、商店や職人向けの道具の製作・修理、商店へ提供する製品の製作などが主体であることから、職人や商店などが集中する大規模町村や都市的な性格を持つ。そして、カテゴリー(2)に属す鉄鍛冶は、この地域で昔から盛んであった漁業の道具を製作していることから、地域の産業、ここでは漁業に密着した性格を持つ。

先に述べたように、鉄道網、道路網の展開・整備、農村部への定期バス網の確立などにより、従来から存在していた村落住民の移動が活性化し、高い技術水準や安価な製品、新たな製品を求めてより頻繁に市場町などの大規模町村へ出掛け、商店や市場で製品を購入することが一般化したとされている。しかし、情報に偏りがあるとはいえ、大規模町村や都市的な性格を持つ代表的な鉄鍛冶を利用する人びとの利用目的について見た限りでは、利用者の主たる目的は、製品の修理や研ぎであり、購入ではない。そして、それらの鉄鍛冶の仕事内容も製作から修理・研ぎへと重点が移動している。利用する人びとの職業に関しても、ビシュヌプル市内で

活動・居住する職人や、商店およびサービス業に従事する人びとが大半を占め、農業に従事する人びとはごく少数である。一方で、ビシュヌプル市内の村落的な性格を持つ鉄鍛冶は、おおむね、交通の要所ではなく、ビシュヌプル市の周縁部で営業をしていることから考えて、その主たる利用者は、周辺住民であり、他の地域から訪れた人びとではない。そして、それらの鉄鍛冶の仕事内容は、蹄鉄の製作を除けば、篠田(1989)が述べる大工と同じように、製作から修理や研ぎに重点が移動しているが、農繁期には、工場製品を含めた鋤・鎌などの農業用具の修理や研ぎに対する需要は多くある。これらのことから、村落住民の移動が活性化し、大規模村落での農業用具などの購入が一般化してはいるものの、それはあくまでも市場や商店からの鉄鍛冶製品や工場製品の購入であり、需要発生の緊急性が高い修理や研ぎは現在でも身近な村落の鉄鍛冶に依存していることは明らかである。

大規模村落や都市的な性格を持つ鉄鍛冶は、それらの場所には職人や商業者が集中し、比較的規模の大きな需要が獲得できることや、商店や業者からの需要が集中するという点から言えば、村落の鉄鍛冶に比べ、製作においても、修理や研ぎにおいても、安定していることは確かである。しかし、大規模村落や都市の住民も、村落住民同様、鉄鍛冶からではなく、商店や市場から製品を購入することが一般化してきており、それらの鉄鍛冶もまた、修理や研ぎにその多くを依存しなければならない。また、村落住民にせよ、大規模村落や都市の住民にせよ、工場製品の普及が浸透しつつあることも確かである。そして、村落の住民は、製品の購入についても、購入を目的とした移動についても、ある程度の経済的負担を強いられるため、頻繁に購入することや移動することは困難であり、需要発生の緊急性の高い農業用具などは、鉄鍛冶の製品であろうと、工場製品であろうと、修理や研ぎを施し長期にわたって使用するとともに、それらの修理や研ぎは身近な村落の鉄鍛冶に依存せざるを得ない。

ビシュヌプル市内の鉄鍛冶をみると、工場製品の修理や研ぎを請け負う鉄鍛冶の割合は非常に高く、利用者の間における工場製品の普及にともなう需要拡大に対応した結果として見る事ができ、工場製品の修理や研ぎに対する需要が減少した製作に対しての需要を補っている可能性もある。しかしながら、製作に対する需要の減少により、村落で営業する鉄鍛冶の数が減少していることは、ビシュヌプル市内の鉄鍛冶へのビシュヌプル市以外の業者からの需要や蹄鉄業者からの需要の拡大から推測することができる。周辺地域の農業が未だに鉄鍛冶や木工職人などに依存していることは確かであり、周辺の鉄鍛冶の衰退、あるいは消滅した村落からの需要は、そうした業者が負担し、それらの業者からの製作に対する需要は、ビシュヌプル市などの大規模町村や都市で営業する鉄鍛冶に集中することになるであろう。

以上から、ビシュヌプル市の鉄鍛冶の経済的・社会的構造をまとめると、ビシュヌプル市には、主として、大規模町村や都市に集中する職人や商業従事者からの需要と、地域の主要な産業である農業や漁業従事者からの需要、そして鉄鍛冶製品を扱う商店や業者からの需要が存在し、市内の鉄鍛冶はそれらの需要ごとに棲み分けがなされている。たとえば、ビシュヌプル市内中心部に位置する鉄鍛冶は、主として市内の職人や商業者からの需要を請け負っており、一方、ビシュヌプル市の周辺部に位置する鉄鍛冶は、村落の鉄鍛冶と同じように、主として周辺地域の農業従事者からの需要を請け負っている。しかし、製作に重点をおいているのは、製作に対する需要の減少にともなって衰退、あるいは消滅した村落の鉄鍛冶を補う役割も果たす、商店や業者からの需要を請け負う鉄鍛冶のみである。村落住民は農業用具などの購入の多くをビシュヌプル市内に依存するものの、その主たる購入場所は市場や商店であり、また、修理や研ぎはその需要発生の緊急性や移動にともなう経済的負担から身近な村落の鉄鍛冶に依存する。

このため、鉄鍛冶はその直接的な恩恵を受けることはなく、市内の鉄鍛冶の多くは修理や研ぎに重点をおいており、商店や市場へ製品を供給するか、あるいは、修理や研ぎについての技術を向上させ、比較的所得水準の高い一部の村落住民からの需要を集中させる以外に、それらからの恩恵を受ける方法はない。

また、ビシュヌプル市の周辺部に位置する鉄鍛冶は、都市的な需要として蹄鉄といった業者からの需要があるものの、主として農業従事者からの需要を請け負っており、その多くは、修理や研ぎに重点をおいていることから、多少の差違はあるものの、製品の購入にビシュヌプル市へ訪れる多くの人びとが居住する村落で営業をしている鉄鍛冶とほぼ同様であると言える。したがって、ビシュヌプル市内中心部に位置する鉄鍛冶を大規模町村あるいは都市の鉄鍛冶、ビシュヌプル市の周辺部に位置する鉄鍛冶を村落の鉄鍛冶と想定するならば、周辺部に位置する鉄鍛冶は製作に対する需要が減少した現在にあっても、修理や研ぎに重点をおき営業を続けていることから、ビシュヌプル市の鉄鍛冶は、周辺部に位置する鉄鍛冶の生存、すなわち村落の鉄鍛冶の生存を可能にする構造を有しているといえる。すなわち、こうしたビシュヌプル市内の鉄鍛冶の経済的・社会的構造は、鉄鍛冶製品の購入に対する需要を市内に集中させつつも、鉄鍛冶に関するすべての需要を集中させるのではなく、市内で購入した製品の修理や研ぎなどに対する比較的長期的で、定期的な需要は、その製品がそうあることを必要としている部分も大きい、各村落の鉄鍛冶が請け負うようにしており、現在においても村落の鉄鍛冶の生存を可能なものとしていることが示せる。

V. おわりに

ビシュヌプル市の鉄鍛冶を事例として、それらが、その周辺地域の村落の鉄鍛冶の生存を可能にさせるような経済的・社会的構造を有していることを確認してきた。しかし、交通網の発達・整備にともなう製作に対する需要の減少は、鉄鍛冶を厳しい競争原理の下に追いやり、村落の鉄鍛冶の経済的基盤を不安定なものにし、鉄鍛冶を「伝統的」職業とするジャーティにおける鉄鍛冶と実際の生業との乖離を少なからず促進させていることが考えられる。

そうした「伝統的」職業と実際の生業との乖離には、篠田(1989)が指摘するように、従来も存在していた「内的な影響要因」と、近年になって著しくなった「外的な影響要因」の2つが考慮されなければならない。すると、「伝統的」職業を放棄は、各世帯が、経済的生存危機から上昇するために、自己の持つ生産的資源を最大限に活用しようとした諸戦略の一形態としてみなすことができる。こうした観点から、ビシュヌプル市のカマーとその世帯に注目し、「外的な影響要因」がもたらす変化と、それによって彼らが行使する生存を目指す戦略を詳細かつ的確に捉え、製作に対する需要を失い、経済的生存危機に陥った鉄鍛冶が経済的上昇を目指し、どのようにして自己の持つ生産的資源を最大限に活用し、生業としての鉄鍛冶を生存させているのか、あるいはそれを放棄してしまったのかを示すことが、中間ジャーティ集団研究の方向性に従い、鉄鍛冶を分析する上で、非常に有効であるとともに、筆者に課せられた今後の課題であると考えている。

謝辞

最後になりましたが、お忙しい中、調査を快く引き受けていただいたビシュヌプルの各鉄鍛冶の皆様、調査にご協力いただきました Md. カーン・ニヤズ(Mohammed Niyaz Khan)氏、そして本調査・研究にさまざまな面から協力、助言、指導を頂きました方々に深く感謝の意を表すとともに、鉄鍛冶の皆様におかれましては、商売の末永くのご繁盛を心からお祈りいたします。

なお、本稿は平成 14-17 年度 21 世紀 COE プログラム「心の文化・生態学的基盤に関する研究拠点(北海道大学 人文科学)」の成果の一部であり、平成 17 年度に北海道大学大学院文学研究科に提出した研究論文Ⅱの一部を加筆・訂正したものである。

[注]

1. ジャジマニ・システムおよびそれについての議論は、Wiser(1979)、Fuller(1977)、鹿野(1977)、田辺(1990)、などに詳しい。
2. 個別の職人・サービスジャーティについては、鹿野(1987, 1992)、溝口(1987)など、複数の職人・サービスジャーティについては、Bose(1980)、中山(1981, 1989)、Desai(1985)、篠田(1989, 1990)など、「伝統的」職業に従事しない職人・サービスジャーティについては、Niitsu(1985)、篠田(1995)、木曾(1995)などがある。
3. 中間ジャーティ集団研究については、福永(1989, 1990)などが詳しい。
4. 中間ジャーティ集団がいかなる集団であるかについての明快な定義はなされておらず、中間ジャーティ集団に焦点をあてた共同研究「北インドにおける中間カーストの台頭と社会経済発展」および「西・南部インドにおける中間カーストの台頭と社会経済発展」においても、押川(1989)が「中・小規模農民や都市中間層を中心とし、カーストではおおむね中間的な位置にある諸集団」(押川 1989:2)として曖昧な定義がなされているに過ぎない。中間ジャーティ集団を理論的な定義からではなく、实际的に抽出するのであれば、福永の方法が有効であろう。しかし、本稿は、中間ジャーティ集団の定義や、その集団そのものについての言及を主とするものではない。多くの村落研究において職人・サービスジャーティは、社会的・経済的・政治的・儀礼的地位においておおむね中間的位置にある。例えば、20 世紀初頭における村落の職人について考察したガドギル(1943)は、村落における職人の社会的位置を見ると、村落社会を 3 層に区分した場合、第 2 層には、主として、鍛冶、大工、油搾り、織工、土器製作、靴製作、などの職人が分類されるとしている。また、福永の結果からも指定カーストや指定トライブに属するもの以外の職人・サービスジャーティは、おおむね中間ジャーティ集団に属するものであると判断して良いであろう。
5. 本文で使用する図表で、特に記載のないものは、筆者自らが作成したものである。
6. 本調査は、ウルドゥ(Urdu)語を母語とし、ヒンディ(Hindi)語、ベンガリー(Bengali)語、英語の話者であり、コルカタ在住のモハメッド・ニヤズ・カーン氏の協力を得て、筆者自らが 2004 年 7~8 月および 2005 年 2~3 月に実施したものである。
7. 床屋については、鹿野(1992)などに詳しい。
8. 土器製作については、鹿野(1987)を参照。

参考文献

Behura, N. K.

1978 *Peasant Potters of Orissa: A Sociological Study*, New Delhi, Sterling Publishers.

Bose, P. K.

1980 *Traditional Craft in a Changing Society: Potters and their Crafts in Gujarat*, Surat, Centre for Social Studies.

Desai, I. P.

1985 Should 'Caste' be the Basis for Recognising the Backwardness? *Caste, Caste-Conflict and Reservation*, Desai, I. P. etc., Delhi, Ajanta Publications.

藤井毅

1989 「カースト論への視角とカースト団体」『アジア経済』、30(3)、87-100、東京、アジア経済研究所。

福永正明

1989 「北インド村落における中間ジャーティ集団の動向—二重対抗関係を中心として—」『アジア経済』、30(3)、87-100、東京、アジア経済研究所。

1990 「北インド東部地域における社会政治変動—中間ジャーティ集団の二重対抗関係—」『インドの社会経済発展とカースト』、141-178、押川文子編、東京、アジア経済研究所。

Fuller, C. J.

1977 *British India or Traditional India? An Anthropological Problem*. *ethos*, 42(I-II), 95-121, Stockholm, The Ethnographical Museum of Sweden.

ガドギル, D. R.

1943 『近世インド産業發達史』、鈴木正四訳、東京、慶應書房。

鹿野勝彦

1977 「社会人類学におけるジャジマニ・システム論の問題点」『アジア・アフリカ言語文化研究』、13、154-168、東京、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

1987 「ベンガル農村のクマール(土器つくりカースト)―バングラデシュ、タンガイル県ミルザプールの事例から―」『民族学研究』、52(2)、1-26、東京、日本民族学会。

1992 「北インドのナーイー(「床屋」カースト)―ウツタル・プラデーシュ州ハルドイ県の事例から―」『金沢大学文学部論集』、12、79-106、金沢、金沢大学文学部行動科学科。

木曾順子

1995 「独立前インドにおける工場労働者の形成」『叢書カースト制度と被差別民第 4 巻 暮らしと経済』、331-358、柳沢悠編、東京、明石書店。

南真木人

2003 「銅鍛冶カーストの近代と銅製水入れの系統分類―西ネパールの事例から―」『国立民族学博物館研究報告』、28(1)、1-38、吹田、国立民族学博物館。

溝口常俊

1987 「バングラデシュにおけるアルミ食器売りの行商活動」『富山大学教養部紀要』、20(1)、113-138、富山、富山大学教養部。

1991 「ある職業カーストの生活」『地理』、36(11)、40-47、東京、古今書院。

中山修一

1981 「インド農村の職人たち」『地理』、26(7)、79-89、東京、古今書院。

1989 「インド村落における職人の機能と展開」『南アジア研究』、1、75-95、東京、日本南アジア学会。

Niitsu, Koichi

1985 The Modernization of Producers of Capital Goods in Nepal: A Study of Blacksmiths, Carpenters, and Engineers, *Asian Cultural Studies*, 15, International Christian University Publications, III-A, 35-63, Tokyo, International Christian University.

押川文子

1989 「特集にあたって」『アジア経済』、30(3)、2-4、東京、アジア経済研究所。

1995 「原皮流通の変化と「皮革カースト」」『叢書カースト制度と被差別民第 4 巻 暮らしと経済』、289-326、柳沢悠編、東京、明石書店。

Risley, H. H.

1891 *The Tribes and Caste of Bengal*, Vol. 1, Ethnographic Glossary. Calcutta, Bengal Secretariat Press.

篠田隆

1989 「インド西部の伝統的職業とジャジマニ―関係―調査村の事例を中心として」『大東文化大学紀要』、27、179-206、東京、大東文化大学。

1990 「グジャラート農村部のカースト、職業、後進性」『インドの社会経済発展とカースト』、53-100、押川文子編、東京、アジア経済研究所。

1995 「グジャラートにおける製造業の展開とカースト」『叢書カースト制度と被差別民第 4 巻 暮らしと経済』、359-401、柳沢悠編、東京、明石書店。

田辺明生

1990 「歴史のなかのインド村落―インド社会論への歴史的視点からの反省―」『民族学研究』、55(3)、296-307、東京、日本民族学会。

Wiser, W. H.

1979 *The Hindu Jajmani System: A Socio-Economic System Interrelating Members of a Hindu Village Community in Services*, AMS ed., New York, AMS Press.

参考ホームページ

Census of India: Directorate of Census Operations, West Bengal
Bankura, West Bengal, Official Website

<http://www.wbcensus.gov.in/>

<http://bankura.nic.in/>

(さいとう・たかゆき／北海道大学大学院)

